Melvilleの根源的懐疑

——*Pierre, or The Ambiguities* 研究——

佐々木　隆

I

筆者は先に，小論，「Ishmael 解釈の為の一試論」の中で，*Moby-Dick* の last scene に注目して次のように述べた。すなわち，

この作品の the last scene は極めて symbolic である。Ishmael はcoffin-buoy につかまったまま太平洋の真ん中に棄て置かれる。宇宙の神秘は未だ解明されず，海の大きな屍衣は五千年前と同じうねりを繰り返している。そこには，Ishmael 復活の輝きよりは，永却の虚無が読みとれはしないだろうか。大宇宙の真っ只中に，未解読の究極的真理を刻んだ棺桶につかまったまま棄て置かれた Ishmael。その image は，再び，*Moby-Dick* 劈頭の Ishmael の image と重なりはしないだろうか。確かに Ishmael の肉体は復活した。しかし，彼の精神は，未だ宇宙的神秘に結びつけられたまま大海に漂っている。Ishmael は Rachel 号によって偶然に救助される。しかし，彼を待っているもの，それは，再びあの Nantucket の波止場であり，新しい Pequod 号，再び繰り返される苦しい航海ではないだろうか。そこには永遠に繰り返される人間的苦悩の回帰性が読みとれるように思う[1]。

そして，Melville は，*Moby-Dick* 完成の一年後，息つく暇もなく，大作 *Pierre, or The Ambiguities* を世に送り出した。このことは，Melville の究極的な真理探索の旅が Ahab の死をもって終ったのではないことを示している。Ishmael は，やはり Nantucket に帰りつき，再び，新しい Pequod 号に乗り込んで，探究を続けることになるのである。

Pierre において新しく登用された Ishmael, Pierre が置かれた状況は，他の young seekers が置かれた状況とは著しく異る。舞台は海から陸に移り，何処の馬の骨とも分らない棄て子は，由緒正しい名門の眉目秀麗な若殿の姿で現われる。従って，そこに展開される story も無骨極まりない鯨との格闘などではなく，ごく皮相的には，富豪の若主人をとりまく Harem 物語的要素なきにしもあらずである。けれどもこの作品の主人公 Pierre が単なる伊達男でないことは言うまでもない。彼も，基本的には，先の若き探究者達，Redburn, Taji, Ishmael と同じ種類の役柄を与えられているからである。

Melville は，「究極的真理の究極的探索」を主題とする前著 *Moby-Dick* において，

All visible obiects, man, are but as pasteboard masks. But in each event—in the living act, the undoubted deed—there, some unknown but still reasoning thing puts forth the mouldings of its features from behind the unreasoning mask. If man will strike, strike through the mask! How can the prisoner reach outside except by thrusting through the wall? To me, the white whale

1) 「Ishmael 解釈の為の一試論——*Moby-Dick* 研究の一断片」*Core*, No. 2, (同志社大学英文学会, 1973), pp. 57—58.

is that wall, shoved near to me.[2)]

と述べて「壁」の向うを問題にし，鯨の「白さ」が持つ多義性に戦慄した。Ahab は，命を賭して白鯨を追撃する。けれども，彼も，時として「壁の向うには何もない」[3)] と思うことがあった。そして Ishmael は，自然のあらゆる色調を作り出す原動力としての光線が，それ自体は常に白または無色であることに思い至る[4)]。すなわち，Melville は，*Pierre* において本格的に展開することになる「無こそが実体である」というモチーフの予影をすでに *Moby-Dick* において示しているのである。

Pierre のplot は，その副題 *the Ambiguities* にもかかわらず，極めて単純である。19才の貴公子 Pierre は，美しく誇り高い母親と共に Saddle Meadows という大農場に住んでおり，Lucy Tartan という金髪碧眼の美少女とは婚約の間柄にあって，今や幸福の絶頂にある。ところが，ある日，彼のもとに素姓不明の黒髪の娘 Isabel Banford から一通の手紙が届き，Pierre は彼女が逆境にある自分の異母姉であることを知らされる。イエス的愛に生きることこそ自らが選ぶべき道であることを確信した Pierre は，母の誇りを考慮して，Isabel との結婚を装い，一切の幸福——Lucy との結婚，農園の相続，母との生活——を捨てて，いま一人の薄幸の娘，私生児を死産した Delly Ulver を伴って New York に移る。真の作家たらんとする Pierre に世間の風当りは厳しく，彼は過労と困窮の内に二人の娘を養わねばならない。しかも，真相を知ってやって来た Lucy を迎えて，四人の生活は複雑な様相を呈する。出版社からの告発，Lucy を取り戻そうとする彼女の兄や従兄 Glen との争い，極度の身心の衰弱は，先に，母を悲しみの余り狂死に追い込んだ彼を，今度は殺人者へと追い立ててしまう。今は Saddle Meadows の相続人で，Lucy への求愛者となった Glen の射殺。そして獄中で Pierre と Isabel との関係を知った Lucy の昇天，最後に Pierre と Isabel の服毒自殺。

以上が story のあらましである。そして，この筋書きは，まさにサロンの婦人向けのメロドラマという印象を与える。けれども，この作品は，こうしたストーリーの通俗性にもかかわらず，「最高善（究極的真理）への志向が単に不幸を導くだけでなく，本来まったく予期されもしなかった悪を結果する」という思想，すなわち，「真理＝無真理ないし反真理」という真理の根本的パラドックスを開示することによって，*Moby-Dick* よりも一層深化した，Melville の根源的懐疑の世界を繰り広げるのである。

II

上にも述べたように，作品冒頭の Pierre は何不自由のない無垢の Pierre であり，いわば堕落前の Adam に相当する。この点，彼の問題への接近の仕方は，Ahab のそれといささか異っている。すなわち，Ahab がはじめから明確な問題意識を持って「探究」をはじめるのに対して，Pierre の探究には "initiation" の要素，「心の成長の要素」が入ってくるからである。

作品劈頭の自然描写は，Pierre の心の平和を象徴している。

> Not a flower stirs; the trees forget to wave; the grass itself seems to have ceased to grow; and all Nature, as if suddenly become conscious of her own profound mystery, and feeling no refuge from it but silence, sinks into this wonderful and indescribable repose. (23)[5)]

世界は緑と金色の光に輝き，そこに現われる Pierre は，元気潑溂とした，露のように新鮮

2) Herman Melville, *Moby-Dick* (New York : Random House, 1950), pp. 161—162.

3) *Ibid.*, p. 162.

4) *Ibid.*, p. 194.

5) Herman Melville, *Pierre, Or the Ambiguities* (New York : The New American Library, 1964), p. 23. 以後，引用文末尾の数字は，本書の頁数を示すものとし，その他の書物からの引用は脚注において出典を明らかにする。

な "bright Pierre" である。

けれども，この美しい自然描写の中に，洞察力をそなえた読者は，これから Melville がこの作品の中で発展させようとしている「沈黙」のモチーフの予影が既に隠されているのを読みとることだろう。そして，同じ章の末尾には，早くも，この若い主人公の運命と作品の帰結とを暗示するような謎めいた語りが挿入されている。

In the country then Nature planted our Pierre ; because Nature intended a rare and original development in Pierre. Never mind if hereby she proved ambiguous to him in the end ; nevertheless, in the beginning she did bravely. (34)

すなわち，ここにおいて Melville は，世界の「根源的曖昧性」を予告し，しかもこの曖昧性の原因を，擬人化された「自然」＝神に帰しているのである。さらに又，それに続く，"we shall see whether this wee little bit scrap of latinity be very far out of the way——*Nemo contra Deum nisi Deus ipse.*" (34-35) という挿入文はいったい何を意味するのだろう。「神自身を除いては何者も神と対立することと能わず」。それは，Pierre の上に，*Moby-Dick* の主人公 Ahab の運命を予告しているのだろうか。

この作品冒頭の謎めいた雰囲気は，神秘的な「顔」の出現によっていよいよ濃厚になる。Pierre は，Lucy との楽しい愛の語らいの中にも，言いようのない不安を感じ，彼女の家の明るい居間にいる時さえ，この不安から解放されない。というのも，彼には，あの「顔」がつきまとって離れないからである。「顔」は歴史的であると同時に予言的，過去に向っては，取り返しのつかない罪を暗示すると同時に，未来に向っては，避け難い災を予告すると言う。それは一言も発しないにもかかわらず，怖しい福音を述べ伝え，自然の装いにおいて立ち現われるが，超自然的な光に照らし出され，感覚的には触れることが出来ても，魂には謎としてとどまる「顔」である。さらに，語り手は，この「顔」が天国と地獄との混合であり，我々を既に定められた運命に放り込むもの，この世において，再び我々を迷子たらしめるものだと言う。(67) つまり，この「顔」は，寺田建比古氏も言うように Pierre の運命と真理との予影[6] と考えてよく，それは，*Moby-Dick* の冒頭，"Loomings" における「鯨」のイメージにつながる。[7] けれども，Pierre が真に世界に直面し，「探究者」となるには，「Isabel の手紙」を待たなければならない。

父の死後このかた，Pierre の心の神殿の中心には，常に，「父の像」が厳然としてそびえていた。それは，何らの汚点も曇りもなく，雪のように白く清らかな姿を与えられ，完全な人間的善と徳とを備えていた。Pierre にとっては，「父の像」は，それなくしては，彼の全宗教が成り立ち得ない心の拠り所だったのである。(93) しかし，Isabel の手紙を手にした Pierre の心の中では，いまや，神聖な「父の像」は音をたてて崩れ去る。聖なる父はもはや無く，あらゆる輝かしさは，彼の山巓から消え去り，あらゆる安らぎも彼の地平にはすでに無い。そして真理が，生まれてはじめて，彼の心の内に黒いうねりを巻き起こすのである。「あー何たることか。真理が最初のうねりで破滅を運んでくるとは……」(90)

Pierre が受けた衝撃は深刻である。彼は生まれてはじめて「真理」を疑わざるを得ない。真理は黒い装いをして現われるのか。それはひそかに我々に近づき，我々の願いには耳も貸さずに，奪い，そして去って行くのか。(91) どうして真理はいつも胸を張って堂々と行進しないのか。何故嘘がもてはやされ，正しい者が苦しむのか。(118) Pierre は深い孤独感に襲われる。父の像は崩れ去り，誇り高い母親に父の秘密は明かせない。Pierre は，いまや石をもて砂漠に追われる Ishmael を自らの内に感じと

6) 寺田建比古『神の沈黙』(筑摩書房，1968)，p. 162. 本書は，Melville 研究の上で，国際的水準に立つ好著であり，Gnosticism の関わりにおいて展開される精緻な分析は示唆に富んでいる。

7) *Moby-Dick*, p. 6.

る。[8] しかも幼い Ishmael に付き添い，慰めてくれる母なる Hagar は自分の傍にはいない。

けれども，元気横溢する Pierre が，長く孤独の淵にたたずんでいることはない。彼は，自らの内奥に，地上とは縁もゆかりもない「神聖なるもの」が秘められてあるのに気付いて立ち上る。

With myself I front thee! Unhand me all fears, and unlock me all spells! Henceforth I will know nothing but Truth; glad truth, or sad Truth; I will know what is, and do what my deepest angel dictates.... then Fate, I have a choice quarrel with thee. Thou art a palterer and a cheat; thou hast lured me on through gay gardens to a gulf. (91)

このようにして，ここにもう一人の「究極的真理の探究者」，「運命への闘士」が誕生する。Pierre は叫ぶ。

I strike through thy helm, and will see thy face, be it Gorgon!... From all idols, I tear all veils; henceforth I will see the hidden things; and live right out i my own hidden life! Now I feel that nothing but Truth can move me so. (91)

そして，Pierre のこの真理に向っての戦闘宣言は，先に引用した *Moby-Dick* の中の Ahab の "Strike through the mask" という叫びに対応する。

暗い真理の前に突如立たされた Pierre の世界把握は急速に深化する。Delly 事件をめぐって牧師 Falsegrave を訪ねた Pierre は，牧師の「何をあなたは問題にしているのか」という問いに対して，"Every thing is the matter; the whole world is the matter." "Heaven and earth is the matter." (193) と答える。真理の深淵を垣間見た Pierre にとって，世界は，いまや，"heartless, proud, ice-gilded world" (116)，運命は，容赦ない思いやりのないもの，人間の喜怒哀楽の心ない商人，そして，そうした運命の下，凍りつくような世界に打ち棄てられた人間は，「捕われ人」(117) として映るのである。

このような世界理解，人間理解の上に立った Pierre を，Delly 事件は，一層熱狂的な真理の探究者，「天上生まれのキリスト」(134) へと仕立て上げていく。私生児を産み落した Delly に対する周囲の眼，なかんずく，キリスト教的価値の代弁者であるはずの自分の母や牧師 Falsegrave の彼女に対する冷い仕打ちの中に，Pierre は，自らが託した最後の望みの綱が断たれてしまったことを知ったからである。弱き者，過てる者に手をさし延べるべき地上の教会は，もはや頼むことが出来ない。それは，Pierre-Melville[9] にとって，まさに，"False Grave" に他ならないからである。

このようにして，完全に孤立無縁となった Pierre は，いまや一切の地上的愛着を断ち切って，Isabel に関する全責任を自らが引き受ける覚悟をする。Pierre は叫ぶ。

May heaven new-string my soul, and confirm me in the Christ-like feeling I first felt.... Guide me, gird me, guard me, this day, ye sovereign powers!.... I cast my eternal die this day, ye powers. If ye forsake me now,—farewell to Faith, farewell to Truth, farewell to God; exiled for ay from God and man, I shall declare myself an equal power with both... (134)

我々は，この Pierre の叫びの中に，Melville の神に対する基本的な姿勢を読みとることが出来る。地上的な教会と訣別した Melville も，決して「神への途」そのものを断念した訳ではない。いや，彼の，地上の教会との訣別はそれが神への途を阻むが故になされたのである。従って，彼の，キリスト的愛の使者たらんとする願いは切実であり，神の庇護を求める祈りは衷心から発したものである。けれども，上の引用の後半の部分はどうだろう。そこには，自らを神

8) 人間存在の Ishmael 性に関する記述は，既に *Moby-Dick* の中にも見られる。cf. *Moby-Dick*, p. 487.

9) Pierreを通して語る Melville.

の位置にまで引き上げようとする人神主義の思想が読みとれる。すなわち，ここには，「神への願い」と，その反語的表現としての「神否定」という，Melville における「神」概念の基本的構図が明示されているのである。

けれども，ここで注意しておかなければならないことは，Melville のこの人神主義の故に，「Melville はもはや Calvin 主義的精神と無縁である」と結論づけるのは，あまりにも早計だということである。なるほど Melville のキリスト教批判，教会批判は辛辣を極めるし，Loren Baritz もその著書，*City on a Hill* の中で，「彼〔Melville〕がその下で育ったカルヴィン主義と理想主義は，彼が宗教的な安息を求める上での主たる敵であった」[10] と言っている。しかし，Baritz がここで言うカルヴィン主義，理想主義とは当時 Melville の周りに生きた人々によって代表されるカルヴィン主義，理想主義を言うのであって，本来の意味でのカルヴィン主義，理想主義を指すのでないことは明らかである。それどころか，「究極的価値」の「究明的探索」を作品のテーマにし続けてきた Melville の姿勢自体が極めて理想主義的であるし，絶対的な真理以外の何物にも満足することが出来なかった彼の気質そのものも，極めてカルヴィン主義的だと言える[11]

いずれにしても，Melville の「神否定」の激しさは，彼の「神への願い」の強さを表わすものと考えてよい。けれども，自らをこのような窮地に陥れた神を Pierre は信頼し続けることが出来るだろうか。神をも人間をも信頼出来なくなった Pierre は，いまや，熱狂的な義務感の中に，自ら，「天上生まれのキリスト」となることを決意する。

しかし，重要なことは，Melville が，Pierre の熱狂的な闘争宣言の直後に，"But Pierre, though charged with the fire of all divineness, his containing thing was made of clay. Ah, muskets the gods have made to carry infinite combustions, and yet made them of clay!"(134—135)という語りをさしはさんでいることである。そして，この語りこそは，Melville の人間観を最も端的に表わすものであり，しかも，Pierre 悲劇の根源に関する暗示ともなっているのである。すなわち，Melville は，ここで，人間存在を「神の火を装塡された土の器」と規定した。このことは，人間が，本来，天上的な要素と地底的な要素の二つをそなえた二元的な存在であることを示している。そしてこの二元性こそが，人間悲劇の根源を成すと Melville は考えるのである。

Pierre は，二度目の Isabel 訪問の際，彼女に，「天使の天使に対する汚れない全き愛」(184) を誓う。けれども，何が，彼を「義務への熱狂者」に駆り立てたのか。それは，彼に生まれつきそなわった天上性の故なのだろうか。Pierre は，Isabel に「異常なまでの肉体的魅力」(extraordinary physical magnetism) (180) を感じなかったか。語りは次のように続く。

> So beautiful, so mystical, so bewilderingly alluring ; speaking of a mournfulness infinitely sweeter and more attractive than all mirthfulness ; that face of glorious suffering; that face of touching loveliness ; that face was Pierre's own sister's ; that face was Isabel's . . . Thus, already, and ere the proposed encounter, he was assured that, in a trans-

---

10) Loren Baritz, *City on a Hill* (New York : John Wiley & Sons, 1964), p. 281.

11) William Sedgewick も，彼の著書，*Herman Melville ; The Tragedy of Mind* (New York : Russel & Russel, 1944) p. 281. で同様の考えを述べている。

なお，「Protestantism は，歴史の中に実現されるどのような文化形態，宗教形態とも同一化することは出来ないし，プロテスタント自体が生み出した文化形態，宗教形態とも同一化することは出来ない。それは，それらを越えた原理を持っている」という Paul Tillch の言に従えば，Melville は，正に Calvinistic-Protestantism の申し子ということになる。(cf. Paul Tillich, *The Protestant Era* [Chicago : U. of Chicago Press, 1948], pp. 161—181.)

cendent degree, womanly beauty, and not womanly ugliness, invited him to champion the right. (135)

このように，Pierre 自身は意識しないまでも，彼の「天上的な使命感」と「Isabel の性的な魅力」とが決して無縁なものでは無かったことが，いまや明らかになった。

III

「神の火を装填された天上生まれのキリスト」は誕生した。けれども，この「天上生まれのキリスト」といえども，やはり，「土の器」でしかない。真理探究の苦しみを骨の髄まで味わった Melville は，若い探究者の足もとを気遣うが故に，このように根元的二元性を担った者としての人間の「究極的真理の究極的探究」を，すべてを見通した年長者の立場から戒める。そして，Melville のこのような姿勢を，我々は，*Moby-Dick* の "The Try Works" の中で既に見た。すなわち，Melville はその中で，語り手を通して次のように言う。

Look not too long in the face of the fire, man!... accept the first hint of the hitching tiller; believe not the artificial fire, when its redness makes all things look ghastly. To-morrow, in the natural sun, the skies will be bright... the glorious, golden, glad sun, the only true lump—all others but liars![12]

つまり，Ishmael-Melville[13]は，この中で，人間は，「自らの頭の中で捏造された観念に従って，幻(究極的真理）を追い求めようなどと考えてはならない」と言うのである。この点，*Pierre* の "More Light, and the Gloom of that Light. More Gloom, and the Light of that Gloom" の章における Melville の思想は "The Try Works" の延長と考えてよい。

すなわち，"More Light" の冒頭，Melville は，

In Those Hyperborean regions, to which enthusiastic Truth, and earnestness, and Independence, will invarbly lead a mind fitted by nature for profound and fearless thought, all objects are seen in a dubious, uncertain, and refracting light. (195)

と述べて，「真理の極地」の稀薄化した空気の中では，太古から認められている人類の「大前提」も，いまやずり落ち，揺れ動き，ついには，まったく逆転してしまうと言う。ちなみに極点においては，磁針は，まったくでたらめに地平線上のあらゆる点を指し示すではないか[14]。従って，真理を余りにも遠くまで追い求めてはならない。そうすることによって，人は，自らの心の指針をまったく失ってしまうことになるのだからと。(195)

この語りの中で，Melville は「真理＝無真理，ないし反真理」というこの作品のモチーフのデッサンを試みている。すなわち，「真理はその極限においては無真理に転化するのではないか」という想念に Melville は，これから肉付けをしようというのである。そして，注意をしておくべきことは，彼が，こういった「真理の極地」での価値の転倒ないし消滅を神の責任に帰しているという点である。Melville は言う，"the very heavens themselves being not innocent of producing this confounding effect, since it is mostly in the heavens themselves that these wonderful mirages are exhibited." と。(195)

けれども，こうした Melville の「究極的真理探究への警告」は未だ Pierre には伏せられてある。この警告が彼のもとに届くためには，それが，Plotinus Plinlimmon の "Pamphlet" として具体的な形を与えられなければならない。しかし，かと言って，「天上生まれのキリスト」

12) *Moby-Dick*, p. 422.

13) Ishmael によって代表される Melville.

14) これと同じイメージが，*Moby-Dick* においても用いられている。すなわち，白鯨（究極的真理）の遊弋圏内に入った Pequod 号の甲板では，突然，羅針が逆転する。

Pierre にとって，Ishmael 的懐疑が無縁だという訳では決してない。彼の熱誠が自らを「真理の徒」へと駆り立てる一方，知性は，彼の決意を "Folly" だと笑う。(197) それはあたかも *Moby-Dick* において Ahab が，"He 〔White Whale〕 is. But he will still be hunted, for all that. What is best let alone, that accursed thing is not always what least allures"[15] と述べることによって示した，白鯨(究極的真理)に対する ambivalent な態度に対応する。

Pierre のこのような自己分裂と懐疑，陰鬱な気分は，上の語りの部分に引き続く Pierre の書斎での場面に象徴的に表わされている。すなわち，ある夜，彼は召し使い達も寝静まって，深閑とした屋敷の書斎にただ一人，とり散らかした書物や用紙を前に，ぼんやりと夢遊病者のように座っているのだが，ふとしたことから二冊の書物に行き当る。一冊は Dante の *Inferno* であり，もう一冊は，*Hamlet* である。そして，始めから開かれていたのか，Pierre が無意識に開いたのか，それらの書物は，次のような詩行を彼の前に示す。すなわち，*Inferno* は，

Through me you pass into the city of Woe ;
Through me you pass into eternal pain ;
Through me, among the people lost for aye.
. . . . . .
All hope abandon, ye who enter here. (198)

という詩句を。そして *Hamlet* は，

The time is out of joint ; —Oh cursed spite,
That ever I was born to set it right ! (198)

という呪いをこめた嘆きを彼の前に示す。[16]

Pierre は，思わず，これらの書物を足蹴にして引き裂くが，Dante は，彼を激しい怒りへと駆り立て，*Hamlet* は，彼に，打つべき対象が何一つ無いのではないかという疑念を抱かせる。すなわち，ここに至ってはじめて，Pierre 自身，「真理は，本来，無真理なのかもしれない」というゾッとするような根源的懐疑の淵に近づくのである。そして，このような Pierre の精神状況は，そのまま，本論冒頭にも触れた *Moby-Dick* の "The Quarter-Deck" の章における Ahab の懐疑に対応する。

けれども *Pierre* の *Pierre* たる所以は，この作品における主人公の懐疑が Ahab 的懐疑の段階に留まらないということである。なるほど Ahab も，「壁の向うには何も無い」と思うこともあったし，「金貨」[17]に刻まれた文様は解き明かすことは出来ないだろうと思った。けれども，Ahab の，神，すなわち真理に対する姿勢は，あくまでも，"I disobey my God in obeying him !"[18] であり，「究極的真理」は，たとえ解き明かし得ないものであるにしろ，その存在そのものまでもが完全に否定されてしまうことはなかった。さらにまた，Ishmael にしたところが，たしかに，彼は，「全色の無色」という想念に悩まされはしたが，抹香の頭には，やはり神性と畏怖を覚えたし，たとえそれが未解読に終わるにしても，白鯨の頭には，「究極的真理」を表わすカルディア文字が深く刻み込まれていた。

ところが，*Pierre* になると，「金貨の文様」，さらには「抹香の頭のカルディア文字」の解読不能が予見されることは勿論，はたして，それらに，解読されるべき意味が，はじめから存在したのかどうかさえもが疑問に付せられる。すなわち，主人公 Pierre に先立って，すべてを

15) *Moby-Dick*, p. 439.

16) この部分は，Melville が苦心をこらした部分とはいえ，いささか出来すぎていて，芝居じみてはいるが，それにしても Pierre の根本気分をよく伝えている。

なお，*Hamlet* からのこの引用は，*Moby-Dick* においても，Ahab の "... cursed be all the things that cast man's eyes aloft to that heaven !" という呪いの言葉として採用されている。(cf. *Moby-Dick*, p. 494.)

17) 白鯨の発見者に与える目的で，Ahab が Pequod 号の main-mast に打ちつけたスペイン金貨。水夫達には白鯨の護符として畏怖されており，それに刻まれた文様は，究極的真理を表わしていると解される。(cf. *Moby-Dick*, pp. 426—432.)

18) *Moby-Dick*, p. 557.

すでに見通してしまっている語り手は，Pierre, Isabel, Delly の一行が Saddle Meadows を落ちのびるに際して，彼らを，未だ明けやらぬ夜の闇と四囲の「沈黙」の中に置きつつ，「沈黙」について次のように語る。

> All profound things, and emotions of things are preceded and attended by Silence.... Silence is the general consecration of the universe. Silence is the invisible laying on of the Divine Pontiff's hands upon the world. Silence is at once the most harmless and the most awful thing in all nature. It speaks of the Reserved Forces of Fate. (237)

そして語り手は，このパラグラフの最後を "Silence is the only Voice of our God." という怖るべき言葉で締めくくっている。

「神の唯一の声は沈黙である」，言い換えれば，「沈黙」こそ神の本質ではないかということであるが，「沈黙」を本質とするような神を，我々は想定することが出来るだろうか。[19] こう考えてくると，「沈黙」の背後には，当然，「神」ではなく，「無」が予測されなければならない。そして，この推測は，"The Church of Apostles" の章で実際の表現となって現われてくる。すなわち，いまや，自分と Isabel との真の関係を明確な形で認識するようになった Pierre に，Melville は，「無こそが実体である」と次のように言わせている。

> "Look : a nothing is the substance, it casts one shadow one way, and another the other way ; and these two shadows cast from one nothing ; these, seems to me, are Virtue and Vice." (310)

つまり，Pierre-Melville は，ここにおいて，善・悪は，世界の唯一，究極の根源である「無」が対逆的に投影されたもの，「無の幻影」に他ならないと言うのである。これは，地上における一切の道徳の根拠，価値の根拠を，「神」にではなく，「根源的な無」に帰せしめる立場であり，従って，この立場に立つ限り，「神の真理の啓示としての道徳」というキリスト教的，ヨーロッパ的精神は，根底から否定されることになる。[20] すなわち，Melville は，ここに至って，ついに，彼の根源的懐疑の帰結点に到達したので

---

19) 『ヨハネによる福音書』（1：1—1：3）においては，次のように言われている。

> はじめに言葉あり，言葉は神と共にあり，言葉は神なりき。この言葉ははじめに神と共にあり，万の物これによりて成り，成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

20) Melville のキリスト教に対する否定的態度は，*Pierre* においても終始一貫しているが，Plinlimmon の "Pamphlet" において，それは，最も明白な形で表わされている。すなわち，その中で Melvilleは，Plinlimmon を介して次のように述べている。

> I would charitably refer that man [the man who says that Plinlimmon's doctrine is false as well as impious] to the history of Christendom for the last 1800 years ; and ask him, whether, in spite of all the maxims of Christ, that history is not just as full of blood, violence, wrong, and iniquity of every kind, as any previous portion of the world's story? Therefore, it follows, that so far as practical results are concerned,... the only great original moral doctrine of Christianity ... has been found a falsen one. (249)

さらにまた，Melville による，ヨーロッパ的精神の根底からの否定は，"Pamphlet" 直前の次の語りに明らかである。

> Plato, and Spinosa, and Goethe, and many more belong to this guild of self-impostors, with a preposterous rabble of Muggletonian Scots and Yankees, whose vile brogue still the more bestreaks the stripedness of their Greek or German Neoplatonical originals. That profound Silence, that only Voice of our God, which I before spoke of ; from that divine thing without a name, those impostor philosophers pretend somehow to have got an answer; which is as absurd, as though they should say they had got water out of stone ; for how can a man get a Voice out of Silence? (241—242)

あり，それは，Nietzsche が，彼の *Die fröhliche Wissenschaft*（『よろこばしき知識』）において「神の死」を予言するのに先立つこと30年前のことであった。

けれども，ここで注意しなければならないことは，Melville が，この「真理＝無真理」という命題を，おそるおそる提示しているという点である。彼は，ここに示された Pierre-Melville の立場にもかかわらず，自分自身，神の存在をまったく否定してしまっている訳ではない。そうではなく，我々は，彼における応答せぬ神への「あせり」こそが，神の存在そのものへの，Melville のこのような否定的発想を導き出したと考えるべきである。そして，Melville の神に対する，このような ambivalent な姿勢は，先に（Ⅰ）で引用した "If ye forsake me now,—— farewell to Faith, farewell to Truth, farewell to God." という Pierre の「闘争宣言」のうちにはっきりと示されている。

20世紀の実存主義文学は，「神の死」から出発する。けれども，Melville は，「神は，何故答え給わないのか」を出発点とする。その立場は，あくまでも，"E'lï, lä'mä sä-bäch' thä-nï?", すなわち，「我が神，我が神，なんぞ我を見棄て給いしや」[21]の立場である。

Ⅳ

「無こそが実体である」という懐疑の底の底にまで達した Melville にとって，究極的真理探索の旅は，いまや，危険であるばかりでなくその意義そのものさえ疑わしいものになってくる。とりわけ，探究者が，「天上性」と「地底性」[22]という根源的二元性を備えた存在である以上，「天上」を目ざしての彼の跳躍は，まさに「死」へのダイビングになりかねない。従って，Melville は，若い探究者の無謀とも言える「真理への挑戦」に，自らも，「真理の炎」の下をくぐった者としての，思いやりのある，しかし諦念の気に満ちた警告を発する。すなわち，Plotinus Plinlimmon[23]の "Pamphlet"（244—249）は，（Ⅲ）で見た，Melville の深い懐疑をその根底に蔵しており，そうした根源的懐疑に対する一つの地上的解決策として Melville が無理にも考え出そうとした「世俗哲学」だと言える。

"Pamphlet" のタイトルは，*EI*, すなわち，ギリシヤ語の「もしも」であり，それは，「三百三十講のうちの一講」という副題を従え，Pierre が手にした部分には，"Lecture First ; Chronometricals and Horologicals" という章があるのみで結論は脱落している。そして，この章のタイトルには，さらに，「新哲学の入口と言うほどのものではないが，その仮りの構えの一部として」という，いやに勿体ぶった注釈がつけられている。従って，我々は，この "Pamphlet" のタイトルを一瞥しただけで，そこに盛られている内容が，これまで見てきた narrator-Melville の語りにも増して，sophisticate されたものであろうということを容易に想像出来る。

さて，それでは，この「問題の章」のタイトルにもなっている "Chronometricals and Horologicals" とはいったい何なのだろうか。Plinlimmon は，"Pamphlet" の冒頭で，まず，それらについて説明を与えている。すなわち，彼によれば，"Chronometer" とは，多くの魂の中でも，神に由来する，最も稀な魂であって，もし，注意深く肉体の中に保たれるならば，常にいたるところで「天上の真理」を啓き示す「天上的な魂」のことであり，Plinlimmon は，こうした「天上生まれの魂」のことを，Greenwich 時間を刻むことによって，船の位置（経度）を

21)『マタイによる福音書』27：46

22) 寺田建比古氏は，『神の沈黙』の中で，人間の中に秘められた「根源的自然」，ないし「性」を表わすのにこの言葉を用いており，筆者も，この小論において，氏のこの適切な用語を使わせて頂くことにする。

23) Plotinus は，新 Platon 派の神秘主義の哲学者 Plōtīnos (204—269) に由来し，Plinlimmon は，浪漫派詩人が好んで引き合いに出す Wales にある山の名前から来ている。なお，Pamphlet の副題に見られる「333」という数字は，中世においては魔術的意味を持つ数字であった。(cf.『神の沈黙』p. 200.)

告げ知らせる London sea-chronometer にたとえて，"Chronometer" と呼ぶのである。そして，このような "Chronometer" によって表わされる「普遍的標準時」，ないし「普遍的価値基準」のことを，彼は，"Chronometericals" と呼び，それに対応する「地方標準時」，ないし「地方的価値基準」のことを "Horologicals" と呼ぶ。

つまり，Plinlimmon-Melville[24]は，このような比喩的な表現を用いることによって，天上に比しての地方である地上においては，我々は，"Chronometricals" に従うのではなく，"Horologicals" に従わなくてはならないと言う。すなわち，中国においては，中国の標準時に従わなければならないのであって，中国にいながら，なお Greenwich 標準時に従おうとするならば，とんでもない馬鹿げたことをしでかすことになる。しかも，彼に言わせれば，天上の Greenwich にある神は，決して，天から遠く隔った「中国」にいる我々に Greenwich 標準時を守ることを期待されてはいない。何故なら人間の地上における知恵が，神にとっては，天上の愚かさであると同様に，神の天上的な知恵が，人間にとっては地上の愚かさ以外の何物でもないことを神は先刻御承知だからである。

しかし，それではいったい何故，神は，時々キリストのような "Chronometer" を遣わして，我々の目を天に向けさせられるのか。これに対する Plinlimmon の答えはこうである。すなわち，神は，人間が時々は，自分達の中国的発想が，この世ではいかに用を為していようとも，それが決して普遍的な妥当性をそなえたものでないことを反省し，さらにまた，神がおられる中央の Greenwich においては，地上とは異る価値基準が適用されているということに思い至ることを期待されるからだと言う。

けれども，Plinlimmon-Melville が，ここで最も強調しようとしたことは，「もしも，人が，日常的な行ないを天上的な基準で律しょうとするならば，彼は，人間の地上的時計〔価値基準〕のことごとくを敵に回し，そのことによって，自らを苦しみと死に追いやるだろう」(246)ということである。Plinlimmon は言う。なるほど，キリストは，"Chronometricals" を教え行なうことによって，愚かさにも，罪にも陥らなかった。けれども，我々のような，「より劣った存在が，Chronometricals の厳密な条規に従って生きるべく，絶対的な努力を試みるならば，その際には，これらより劣った存在は，前代未聞の奇妙なまたとない愚かさや罪に導かれることになりがちである」(246)[25]と。そして，Plinlimmon がこの部分で言わんとすることはそのまま，主人公 Pierre の運命の予告となっているのである。

なお，このようにして，天上における真理と地上における真理との絶対的な分裂に思い至った Plinlimmon-Melville は，いまや，その "Pamphlet" を結ぶに当って，次のような「便宜主義的」処生術を紹介する。

> ...in things terrestrial (horological) a man must not be governed by ideas celestial (chronometrical); ...certain minor self-renunciations in this life his own mere instinct for his own every-day general well-being will teach him to make, but he must by no means make a complete unconditional sacrifice of himself in behalf of any other being, or any cause, or any conceit.
>
> .....
>
> A virtuous expediency, then, seems the highest desirable or attainable earthly excellence for the mass of men, and is the only earthly excellence that their Creator intended for them. (248)[26]

24) Plinlimmon を通じて語る Melville.

25) 引用文中の傍点の部分は原文ではイタリックス。

26) William Braswell は，その著書，*Melville's Religious Thought* (New York : Pageant Books, 1959), pp. 81—82. の中で，"Pamphlet" のアイディアは，聖書に由来しているかもしれないと述べている。すなわち，彼は，その論拠として，Melville が，「この世の賢者は，神の恩寵に与る為には，愚

そして，おそらくは，この「道徳にかなった便宜主義」こそが，「天上生まれの」Pierre[27]を救う唯一の "Talismanic Secret" と成り得たかもしれない。けれども，Pierre がそれを手にしていた時には，彼にはその意味するところが理解出来ず，彼が真にそれを必要とした時にはそれは常に彼から隠されてあった。

Lawrance Thompson は，その著書，*Melville's Quarrel with God* の中で，「Melville は，自らが終始嘲けり，それに対して絶望的な戦いを挑んだ，浅簿なキリスト教の教義を正確に代表させる為に Plinlimmon の Pamphlet を考え出し，利用している」[28]と述べている。けれども，"Pamphlet" における Plinlimmon の哲学を，世界および人類全般の問題の存在にすら気付かない，Mrs. Glendinning や Rev. Falsegrave などの "Shallow Christian doctrine" と同一視してしまうのは，いささか早計である。

確かに "Pamphlet" は，表面的には，Shallow Christian 達が好みそうな，凡庸な功利主義的処世哲学のように見える。けれども，それは，問題の存在にすら気付かない，ましてや，問題に対決しようなどとは夢にも思ったことのないような，そのような浅簿な連中の「言い逃れ」では断じてない。それは，一度は，真理の炎の下をくぐり抜けた，老熟した Ishmael の哲学，「苦悩を経た知恵」とも言うべきものである。

従って，*Pierre* における，Pierre と Plinlimmon との関係は，*Moby-Dick* における Ahab と Ishmael との関係に対応すると考えてよい。すなわち，*Moby-Dick* において，Ishmael は，基本的に，世界および人間に関する根本気分を Ahab と分ち合い，彼の「究極的真理の究極的探究」に賛同する。けれども，結果的には，Ishmael は，地上での悪を避け，この世に生を全うせんが為に，あえて，「天上の時間」を排するのである。そして，このパターンは，Pierre と Plinlimmon との場合にもそのままあてはまる。すなわち，Plinlimmon も，基底的な世界認識，および生の問題に関しては，Pierre と同じ基盤に立っており，彼は，Pierre の真理への熱誠の意義をも十分に理解し，認めている。けれども，齢経た Plinlimmon は，自らの経験から，「究極的真理の究極的探究」が，結果的には，「天上の真理」とは裏はらな「死」と「悪」を招くことを知っているが故に，やむをえず，"Virtuous Expediency" を説くのである。従って，そこには Thompson の言うような "Shallowness" はもはや認められない。そして，Melville 自身は，*Moby-Dick* においてもそうであったように，この作品においても Pierre 的価値と Plinlimmon 的価値との間に絶えず「揺れ動く」のである。なお，このことは Melville 本人の次の言葉によっても裏付けられる。すなわち，Melville は，Plinlimmon の "Pamphlet" について，次のように言っている。

> I confess, that I myself can derive no conclusion which permanently satisfies those peculiar motions in my soul, to which that lecture seems more particularly addressed.[29]

かにならなければならない」という Paul の言葉にアンダーラインを施していることを挙げている。

すなわち，「コリント人への手紙」(3 : 18—20) の中には次のような記述がある。

> 誰も自らを欺くな，汝らのうち，この世にて自らを賢しと思う者は，賢くならんために愚なる者となれ。それは，この世の知恵は神の前に愚なればなり…主は知者の念の虚しきを知り給う。

さらにまた，Braswell は，同じ書物 (pp. 86—87.) において，Melville は，"Pamphlet" のアイディアのヒントを，Robert Burton (1574—1640) の憂うつに関する医学書，*The Anatomy of Melancholy* から得たかもしれないと言っている。

なお，同じ問題に関して，寺田建比古氏は，"Pamphlet" の一つの起源は，Pascal にあったかもしれないと言っている。(cf.『神の沈黙』p. 202.)

27) 傍点は筆者，今やこれら傍点を付した言葉には ironical な色調が濃厚となる。

28) Lawrance Thompson, *Melville's Quarrel with God* (New Jersey : Princeton University Press, 1952), p. 278.

29) *Herman Melville ; The Tragedy of Mind*, p. 162. からの引用。Sedgewick は，その出典を明らかにしていない。

すなわち，Melville は，ここにおいてもやはり，二つの価値の間の "ambivalent" な存在として留まらざるを得なかったのである。[30]

なお，従来，批評家は，Plinlimmon のこの "Pamphlet" が，Melville の説く「真理」なのか，それとも "satire" なのかということを問題にし続けてきたが，[31] そういった発想自体が誤りであることが，これまで述べてきたことから明らかである。Melville は，Pierre の中にも，Plinlimmon の中にも「真理」を認めた。けれども，彼は，ついに，これら二つの「真理」の中間に留まらざるを得なかったのである。

V

Melville は，Pierre の為に "Pamphlet" を用意した。けれども，それは，彼が本当にそれを必要とする時には遂に彼の手許には届かなかった。それは，結局，「究極的真理の究極的探究者」，Pierre の "Talismanic Secret" とは成り得なかったのである。

従って，Pierre は，この劇の幕を自らが下すまで，「天上生まれのキリスト」の役を演じきらねばならない。しかも，「天上性」と「地底性」という根源的二元性を背負いつつ。

Pierre は，Delly らと共に New York への出奔を試みる前，二度目に Isabel を訪った際，すでに，彼女の内に強烈な "Physical magnetism", "physical electricalness" を感じとっていた。けれども，彼は，この時には，まだ，Isabel の内に，自分の最も内的な思想や行動を縛る不思議な力が存在することをぼんやりとしか感じておらず，その呪縛力の正体が何であるかということをはっきりとは知らなかった。彼女が，肉体的かつ超自然的な，異常な大気の魔力 (extraordinary atmospheric spell) で自分を彼女に結びつけ，逃れ難くしてしまったと Pierre が思うようになるのは，この最初の「磁力の夜」(first magnetic night) からしばらく後のことであり，この呪縛力が，圧倒的な支配力を持っていることに気付くのは，さらに後になってからのことである。すなわち，当時にあっては，まだすべてが，絶えず這い来たっては凝縮する「曖昧さの霞」によって覆われていたのである。けれども，やがて，Pierre にも，その呪縛力の輪郭が次第にはっきりした形をとるようになる。すなわち，彼は，この魔力について次のように言っている。

> This spell seemed one with that Pantheistic masterspell, which eternally locks in mystery and in muteness the universal subject world, and the physical electricalness of Isabel seemed reciprocal with the heat-lightnings and the ground-lightnings nigh to which it had first become revealed to Pierre. She seemed molded from fire and air, vivified at some Voltaic pile of August thunder-clouds heaped against the sunset. (181)

我々は，この「汎神論的な呪縛力」に関する説明を読む時，容易に，*Moby-Dick* の "The Candles" の章を思い出さずにはおれない。嵐の夜，Ahab は，Pequod 号の三本のマストの頂に輝く蒼白いセント・エルモの火を睨みつけながら，"Light though thou be, thou leapest out of darkness ; but I am darkness leaping out of light, leeping out of thee !"[32] と叫ぶ。

---

30) Melville の「究極的真理探究」に対する ambivalent な姿勢については，拙稿 "Melville's Quest for the Ultimate ; A Study of *Mody-Dick*," *Doshisha Literature* No. 27. (同志社大学英文学会，1973) を参照されたい。

31) James E. Miller も，その著書，*A Reader's Guide to Herman Melville* (London : Thames and Hudson, 1962) の中で，

> …is Plinlimmon's advocacy of a "virtuous expediency" rather than an "absolute" morality Melville's truth or Melville's satire ? The answer to this question determines the theme of *Pierre*. (p. 119.)

と述べて，この点を問題にしている。

32) *Moby-Dick*, p. 500.

「マストに輝く蒼白い炎」。それは，まぎれもなく，我々の意識を創造の神秘の世界へと導いた。すなわち，それは，*Moby Dick* において，あらゆる生命の源としての「根源的自然」を暗示した訳だが，この「白い炎」のイメージは，*Pierre* においても，そのまま，上の引用中の "lightning" のイメージにつながる。つまり，後者の場合にも，"lightning は，やはり，「根源的自然」を表わすのだが，この場合には，さらに，「根源的自然」は，そのまま，イコール「性」と考えてよい。従って，稲光の中に妖しく照らし出される黒髪の Isabel は，金髪碧眼の Lucy が，絶対的な天上性の形象化であるのに対して，地底的，根源的な生命力，性を表わしていると言える。

そして，Pierre も，New York に移り住む頃にはようやく，こうした Isabel のディオニソス的本質に思い至るようになる。すなわち，彼も，いまや異性としての Isabel をはっきりと自覚するだけでなく，彼自身の「究極的真理の究極的探究」の意味そのものをも疑うようになる。つまり，この期に及んで，探究者 Pierre の心中には，「極端な徳も，つまるところは，途方もない悪への背信的仲介者にすぎないのではないか」(310) という怖るべき懐疑が去来するのである。

従って，Pierre が，終幕近く，過度の肉体的精神的疲労からくる失神状態の中で幻として見る，巨人 "Enceladus" の姿は，まさに，こういった状態にある主人公を，Melville が可視的に形象化したものだと言える。

Enceladus とは，Saddle Meadows からほど遠くないところにある絶壁の下に横たわるスフィンクス状の岩山の一つであるが，Pierre は，これらの岩山を巨人族に見たて，その中でも最も際だった岩山を，巨人族中の巨人，Enceladus[33] になぞらえるのである。そして，Melville は，この Enceladus に，Pierre と同様の「根源的二元性」を与え，その姿を次のように描いている。

> a form defiant, a form of awfulness. You saw Enceladus the Titan, the most potent of all the giants, writhing from out the imprisoning earth ;—turbaned with upborne moss he writhed ; still though armless, resisting with his whole striving trunk, the Pelion and the Ossa hurled back at him ;—turbaned with upborne moss he writhed ; still turning his unconquerable front toward that majestic mount eternally in vain assailed by him, and which, when it had stormed him off ; had his undoffable incubus upon him, and deridingly left him there to bay out his ineffectual howl. (387)

自然（Nature）の為に，腕を切断され，太ももから上はすべての関節を奪われた身でありながら，決して宥められることのない憎しみを晴らすべく，自らの巨大な胴体を破壊槌に代え，弓のように張り出した肋骨を，力の限り，繰り返し難攻不落の絶壁に投げつける Enceladus のイメージ。それは，同じく，不具の身でありながら，自らの「魂の天上性」を主張して，最後の一息まで白鯨に挑もうとする Ahab のイメージに重ならないだろうか。

半身は地中に埋もれながら，天を睨みつける不具の Enceladus. その姿は，Melville における「究極的真理の究極的探究者」に共通するイメージである。Ahab も，Enceladus も，舞台に登場する際には，すでに，根源的自然ない

33) ギリシヤ神話において，Uranus(天)と Gaea (地)の子で巨人の Cronos は，父の王位を奪ったが，後に彼自身も吾が子 Zeus によって退けられる。Enceladus は，吾が子 Cronos の仇，Zeus に復讐させるべく，Gaea が産んだ巨人であるが，結局は，Zeus に破れて Etna 山に鎖で縛られる。けれども，ここにおいては，彼は，本文中の引用にも見られるように，Pelion 山と Ossa 山とに埋められている。

なお，Pelion 山，Ossa 山とは，神々との戦いに際して，巨人達が天に至らんとして積み上げた山々を言う。

し神によって，その手足は切断されている。そして，この事実は，Melvilleにおいては，「究極的真理の究極的探究者」としての人間の不完全性を象徴すると考えてよい。[34] 地底的自然に強く結びつけられながら，なおかつ「天上」を志向する不完全な人間。これは，Melville における人間理解の基本的な図式なのである。

けれども，*Pierre* の中で示される「人間の不完全性」は，*Moby-Dick* における「人間の不完全性」よりも，はるかに複雑な様相を呈している。すなわち，*Pierre* における「人間の不完全性」は，*Moby-Dick* におけるそれのように，その淵源を，創造主である神にのみ帰するわけにはいかないからである。Enceladus の腕はなるほど根源的自然ないし神によって奪われている。けれども彼には，それと同時に，「近親相姦の子」という，人間の側に由来する暗い属性が与えられているのである。[35] つまり，Enceladus の出生には，「近親相姦」の拭い切れない秘密が隠されている，すなわち，Enceladus は，Old Titan の息子であるが，その Old Titan は，互いに兄妹である Coelus（天）と Terra（地）の息子であり，しかも，Enceladus を生むに当っての彼の相手は，母なる Terra に他ならない。従って，Enceladus は，天と地の間の二重の近親相姦の所産，「近親相姦の息子にして孫」(388) ということになる。

さらにまた，Melville に言わせれば，このような「天」と「地」との間の近親相姦の図式は，そのまま，Pierre の内面についても当てはまる。つまり，彼によれば，Pierre の中で有機的に混じり合った天上性と地底性は，いま一つの，天上を志向してはいるが，まだ完全には地上から脱け出しきっていない，混濁した，はっきりしない気分を醸し出し，この気分は，その地底性の故に，ふたたび大地である母の元へと引き下されて，Pierre の内部に二重に近親相姦的な Enceladus を産み出したと言うのである。しかも，Enceladus の場合も，Pierreの場合も，これら「二重の近親相姦」においては，その基本的構図からして，「大地性」は「天上性」に比べて二倍の比重を持っている。そして，このことは，とりもなおさず，Enceladus-Pierre の「天上」に向っての努力が，結果的には無効に終るであろうことを予測せしめるのである。こういった意味で，"Enceladus the Titan" の幻影は，Pierre が置かれた存在境位及び彼の運命を象徴的に表わしていると言える。

なるほど，Pierre が "Enceladus the Titan" の夢を見るのは，彼の運命も終幕間近い頃である。けれども，この夢に表わされた根本気分は先にも述べたように，New York に移り住んでほど経ぬ Pierre の内に，すでに見られる。すなわち，いまや，自らが置かれた状況をはっきりと自覚するに至った Pierre にとって，姉 Isabel は，単なる彼の「天上的使命」の対象に留まらない。彼女は，明らかに，Pierre の「性」の対象でもあるのだ。そして，自分自身の，この認識に苛立つ Pierre は，Isabel に向って思わず，"Call me brother no more! How knowest thou I am thy brother? . . . . I am Pierre, and thou Isabel, wide brother and sister in the common humanity,—no more."(310) と叫ぶ。

この叫びの奥には確かに Pierre の「罪の意」識」が秘められている。けれども，この「叫び」の色調は，すでに，「天上性」から「地底性」へと移行してしまっている。すなわち，「無こそが実体である」という根源的懐疑の底に達した Pierre は，Ahab のように，断乎として「天上」に向って舵とるのではなく，いまや，「天上

34) cf. "Melville's Quest for the Ultimate; A Study of *Moby-Dick*," *Doshisha Literature* No. 27, pp. 70—71.

35) *Moby-Dick* においては，「人間の不完全性」は，Ahab が片足を奪い去られた存在であることによって象徴され，そこに示された「不完全性」自体は，いかようにも解釈出来た訳だが，*Pierre* おいては，それは，「肉欲」という具体的なイメージを与えられることによって，Melville の人間把握に二元論的根拠を与え，この作品における Melville の人間理解を *Moby-Dick* にも増して深いものにしている。

的真理」に対して居直りの姿勢をさえ示す。すなわち，Pierre は，(III) で引用した，「無こそが実体なり」というあの陳述の後，Isabel に，"It is all a dream—we dream that we dreamed we dream." と語りかけるが，さらに，"From nothing proceeds nothing, Isabel! How can one sin in a dream?" (311) と，自らにも言い聞かせながら，暗闇の中で彼女を抱きしめるのである。

ここに至っては，もはや我々は，Pierre の中に，伝統的な悲劇の英雄，ないしは，実存主義文学における「反抗的人間」に固有な「生の dynamism」を認めることは出来ない。Ahab もなるほど，白鯨との一騎打ちを前にして，自分をとりまく大空の明るさ，やさしさに思わず涙した。けれども彼は，最後の最後まで，"Towards thee I roll, thou all-destroying but unconquering whale ; to the last I grapple with thee ; from hell's heart I stab at thee ; for hate's sake I spit my last breath at thee!"[36] と叫んで，自らの魂の天上性を主張する。けれども *Pierre* の場合には，その終幕近く，主人公の天上性は，すでに色あせ，地底性のどす黒い渦が，わずかに漂う天上性の泡沫を，己が渦中に巻き込まんと，その抗し難い力を，我らが「天上生れのキリスト」の上にふるうのである。従って，この段階においては，Pierre の存在基調は，すでに「戦う Pierre」から「流される Pierre」に堕ちつつある。

VI

このようにして，「天上性」と「地底性」という二つの element から成る「曖昧さ」の霞が漂う中，黒い渦に巻き込まれつつある Pierre には，もはや自らの運命の舵をとる力はない。彼は，Ahab とは違った意味で黒い渦の底へと没していくのである。

Ahab の死には，伝統的な悲劇の主人公にのみ与えられる称賛が用意されていた。すべての乗組員と船体を失いながら，なおも波間に屹立する Pequod 号の mainmast には，いぜんとして Ahab の旗がはためき，天上の鳥が，彼の死を弔うかのように打ちすえられていた。けれども，*Pierre* の結末には，このような神話的，旧約的な雰囲気はさらにない。

すでに二人の身内を死に追いやり，いままた Lucy を，自らが犯した過ちの故に夭死させてしまった Pierre は，獄中で Isabel を掻き抱きながら，"Girl! wife or sister, saint or fiend! in thy breasts, life for infants lodgeth not, but death-milk for thee and me !—The drug !" (403) と叫んで，その胸元から毒薬をとり出してあおる。そして，今まさに降りなんとする幕の下，Isabel は，Pierre の上に崩おれ，彼女の長い髪は，漆黒の蔓でもって彼の全身を蔽い包むのである。

この場面は確かに *Hamlet* の終幕ないし，*Romeo and Juliet* における Capulet 家の地下墳墓の場面を思い出させない訳ではない。けれども，*Hamlet* 終幕における Horatio の主人公に対する訣別の辞と，*Pierre* における Millthorp の主人公に対する別れの言葉との間には，何という大きな隔たりがあることか。すなわち，Horatio が，Hamlet の死に臨んで，主人公の魂の高貴さを称えつつ，"Now cracks a noble heart. Good night, sweet prince ; And flights of angels sing thee to thy rest!"[37] と語りかけるのに対して，Millthorp は，親友 Pierre の骸に，"What scornful innocence rests on thy lips, my friend!"(405) という，一大悲劇を閉じるには凡そ似つかわしくない言葉しか用意していない。さらにまた，*Romeo* and *Juliet* における Romeo と Pierre に関しては，F. O. Matthiessen が，"Pierre's immaturity as a tragic hero differentiates him not only from Hamlet but from Romeo....Pierre has no growth into Romeo's final recognition of the

36) *Moby-Dick*, p. 565.

37) William Shakespeare, *Hamlet* V, ii, 369—371.

lasting values of love."[38] と述べている。このように，*Pierre* は，雰囲気，用語の両面で Elizabeth 朝悲劇の気分を漂わせてはいるものの，その結末において Shakespeare 悲劇の二番煎じに堕してしまっているのである。

Pierre の前の作品 *Moby-Dick* においても，主人公 Ahab は，結局，白鯨を仕留めることが出来ないまま，海の藻屑と消え去る。けれども彼は，滅びのうちになお，自らの魂の高貴さを確認することが出来た。"Oh, now I feel my topmost greatness lies in my topmost grief."[39] という彼の言葉の中には，及ぶべくもない敵と果敢に戦い，見事に散りゆかんとする英雄にのみ許される，運命との和解が見られる。[40] けれども，同じく，今まさに死なんとする Pierre には，人間精神の偉大さに対する讃仰は毫もないし，神意の受容など勿論ない。そこには伝統的な悲劇に固有な Catharsis は完全に欠落しているのである。

上に見たように，Pierre は，明らかに伝統的な悲劇の主人公としての要件を欠いている。けれども，彼は，①自らを宇宙の虚偽の犠牲者と捉える点において，②正義の屈辱的破碇としての死を意識しつつ，それでもなお，「存在の極限」への絶望的・探索を試みるという点において，そしてその行きつく先は，結局，③万物の究極的現実としての「無」の確認に留まるという点において，現代悲劇の「非英雄的英雄」と共通する部分が多い。[41] しかし，このことは，Pierre が，即，現代悲劇の主人公であるということを意味するものではない。

すなわち，現代悲劇の主人公は，Pierre とは違って，もはや神（究極的真理）を必要としない。神はすでに死んでおり，彼は，世界の無意味性ということを骨の髄まで知りぬいている。つまり，現代悲劇においては，「無こそが実体である」ということは，既定の事実なのである。しかし，それでもなお，選ばれた魂は，決してこの認識に自らを閉じこめておくことはない。彼は，「世界および人間存在の無意味性」という宿命そのものに断乎として抗議する。しかも，彼は，自分の反抗（悲劇的探究）が無意味なものであることも十分承知している。けれども，彼は，自らが選んだ人間的な諸価値を全力をあげて守り抜くことにおいて，自らの存在を証ししようとする。そして，20世紀の悲劇的ヴィジョンは，このような非英雄的英雄の勇気と尊厳に対して，限りない拍手を送るのである。無意味な世界に生きる現代人の存在状況はまさに絶望的である。けれども，現代の悲劇は，決して「諦め」という感情を起こさせない。それは，ニヒリスティックな世界観に釣り合うだけの生命力を内に秘めており，絶望から立ち上る為の精神力を我々に与えるのである。

これに対して *Pierre* においては，神（究極的真理）はまだ死に切ってはいない。*Moby-Dick* とは違って，この作品では，神は殆んど死んでいる。けれども神の存在に関する一縷の望みがまったく否定されてしまった訳ではない。Pierre-Melville の Calvin 主義的精神は，この作品においても，「神の全能的支配」と「その証し」を強く要請する，けれども，神を絶対的に志向しつつ「根源的な無」に行きつく時，Pierre には，現代悲劇の英雄に見られた反抗の意味さえもが疑わしいものとなり，深い絶望と不安のみが残る。すなわち，「神」と「無」との中間に置かれた Pierre-Melville にとってはすべてが「疑問の形」に留まる。そして，このことこそが Pierre-Melville の世界に逃れ難くつきまとう "ambiguity" の由って来る所な

38) F. O. Matthiessen, *American Renaissance* (New York : Oxford University Press, 1941), p. 470.

39) *Moby-Dick*, p. 565.

40) Richard B. Sewall も，この点に関して，彼の著書，*The Vision of Tragedy* (New Haven : Yale University Press, 1959) の中で，"to the extent that [Ahab] transcends it [human existence], finds 'greatness' in suffering, he is tragic hero." と述べている。(p. 104.)

41) この小論における現代悲劇に対する考え方は，Charles I. Glicksberg の *The Tragic Vision in Twentieth-Century Literature* (Carbondale : Southern Illinois University Press, 1963) に負うところが多い。

のである。神は本当にいないのか。神がいないとすれば諸悪の責任はどこにあるのか。神が死に切っていない以上，人間がすべての責任を引き受ける訳にはいかない。そこでは，まだ，人間の側に，「自分こそが，自らの自由と責任の主体である」という実存主義的な覚悟は出来ていない。従って，このような「宙ぶらりん」の状態にある人間にとっては，神的 context における「究極的真理の究極的探索」も，人間的 context における「反抗」も，共に，はたして「意味があるのだろうか」という「疑問の形」に留まらざるを得ない。このように，人間のぎりぎりの勇気と尊厳さえもが疑問に付されてしまった今，後に残るものは，「人間存在の全き無意味性」と「真理の無真理性」という，ぞっとするような20世紀的認識のみである。そこでは人間は，「神」と「地獄」との中間に捨て置かれたまま，上昇への契機を根底から断たれてしまっている。

以上見てきたように，*Pierre* は，「究極的真理」への志向性に置いて伝統的悲劇の流れを酌みつつ，「真理の無真理性」という認識を現代悲劇と共有する。従って，この作品は，基本的には，伝統的悲劇と現代悲劇との中間に位置すると言える。けれども，*Pierre* の世界が，根源的に「赦し」を欠く世界であること，優れた悲劇に固有な「生的 dynamism」（反抗的自由）を欠くということ，さらにまた，芸術的にも Elizabeth 朝二流悲劇に堕している[42]という点で，この作品を「真の悲劇」と呼ぶことは出来ない。

けれども，もう一歩考えを進めるならば，現代は，「悲劇」そのものが成り立ち得ない状況にあるのではないだろうか。我々の時代にあっては，「伝統的な悲劇」は勿論のこと，「現代悲劇」が成立することも極めて稀である。Camus, Sartre, Kafka 等に見られる，現代悲劇の主人公達も，やはり，人間としては例外に属するのであり，多くの人間はやはり Pierre と同様，自らが設定した「意味への戦い」において，自身の「人間的不完全さ」（根源的二元性）に大きく制約されている。従って，これら大部分の不完全な人間にとっては，現代悲劇の中で展開される「人生肯定」の姿勢よりも，*Pierre* の中で開示される，戦慄すべき現代人の閉塞的存在境位，ないしは極限的危機的状況の方が，はるかに迫真性をもって迫るのではないだろうか。*Pierre* は，まさにこういった，Melville の「無こそ実体なり」という鋭い問題への衝迫と，人間存在，および現代社会の真相の先駆的開示という点で，西欧文学史上に重要な位置を占めるべき作品である。[43]

---

42) Lewis Mumford も，その著書，*Herman Melville* (New York : Harcourt Brace, 1929) p. 207. の中で，*Pierre* の芸術性を論じて次のように言っている。

> In language...from the first page, it is perfervid and poetical in a mawkish way. With the disclosure of the two lovers, Pierre and Lucy, in the opening chapter, the style becomes a perfumed silk, taken from an Elizabethan Chamber romance.

そして，さらに彼は，同じ書物の中で (pp. 217—218.), この作品について，The book is a precious crystal smashed out of its natural geometrical shape." という適切な評価を下している。即ち，Mumford は，*Pierre* が natural geometrical shape（高い芸術性）を維持することは出来なかったが，a precious crystal（高度の思想性をそなえた作品）であるということを言おうとしたのだと思う。

43) *Pierre* の出版は，その先駆性の故に，それまで Melivlle を最も寛大に支持し続けてきた Evert Dyckinck をさえ彼から離反させてしまい (cf. *Literary World*. Vol. 11, pp. 118—120), 今世紀に入って，*Moby-Dick* が世に認められるようになってからも，この作品は，依然として，Melville におけるマイナーな作品，ないし失敗作という評価しか与えられて来なかった。けれども，*Pierre* 出版以後のヨーロッパ精神史をふり返る時，筆者は，この作品が担っている思想上の重要性を強調せずにはおれない。

すなわち，*Moby-Dick*, *Pierre* の出版以後，西欧世界には，相次いで，人類の精神構造を根底から

揺さぶるような出来事が起るが，その内の最たるものは何といっても，1859年の『種の起源』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*) の出版と，1883年，Nietzsche による『悦ばしき知識』(*Die fröhliche Wissenschaft*) の出版であろう。

Darwin は，神を創造主の座から引き下し，Nietzsche は，「神の死」を宣告した。けれども，彼らによる「神の至上権剝奪の宣言」や，「神の死の宣告」の前には，当然，*Pierre* において Melville が示したような「神の全能に対する根源的懐疑」が来るべきではないか。しかも，この作品で Melville が展開する「根源的懐疑」は，この章でも述べたように，19世紀のみならず，20世紀的精神とも深く関わっている。

従って，この意味からも，我々が，Melville，および，彼の根源的懐疑の帰結としての *Pierre* を，19世紀後半から20世紀にかけてのヨーロッパ精神史の一つの源流に位置づけることは，決して誤りとは言えないと思う。

(同志社大学アメリカ研究所専任研究員)